

保育の手帖

自然に関する「冬と植物」筆

者は国立科学博物館技官丸山尚敏氏であるが、植物に親しみの薄い冬であるが、春を待つ心を

幼児に強くうつつたえて、自然観察に導くように、具体的問題にふれてある。保育内容でも「自然」はともすれば時期を逸したりしやすいので、よい参考になろう。発見のよろこびは、自然観察に最大の効果をもたらす基本的要素である。幼児の生き生きした声やおどろきの表情を思い出してくれしくなる。

「リズム楽器を用いての保育」増子とし氏はリズム楽器が日々の保育にどんな姿でとり入れられているかをかかれ、教育的視点に立っての将来の音楽教育に役立つ指導が

ともなうとともに、保育者の、保育目的が第一義でなく、子どもが主体であることを強調しておられる。保育内容が保育の目的のために孤立してしまつて子どもがそれに踊らされることのないよう反省する必要がある。

「幼児の画の性格とその指導」は質問に対する武井武雄氏の回答である。質問者もこの園でも共通に持っていると思われる当を得たよい質問を発しているので、夢中になって回答を読んだ。誌上のことであるから深く掘り下げたところまではふれていないが、問題に対する指導者のもつ知識や信念、技術の概観がつかめて、たいへん勉強になった。実際と理論が結びついており、有効な記事と思う。

その他「社会性の指導をねんと遊びの中から捉えられた私の研究」長倉マズ氏、「子どものための人形劇について」ブーク代表川尻泰司氏、「保育案の考え方と作り方」保育案研究委員会「どうぶつのちえと子ども」

東大絵本研究グループの絵本の研究など充実した内容である。

保育の友

今月は新年号であるだけに、面白い話題、

おもしろい紹介などが多くもられている。座談会『保母さん、恋愛・結婚を大いに語る』や、宮下俊彦氏の『小説にみる保育―壺井栄の作品をめぐって―』などはその意味でおもしろい内容である。

最近の心理学の流行から、そしてまた時節がらという面も加わって、児童相談所の門をくぐる母親がこのところ随分多いようであるが、グラビヤ『児童相談室』(日本社会事業短期大学児童相談室)をみると、その様子がよくうかがえる。

これと関連して、この相談室の石井哲夫氏が『おかあさんへの注文』と題して書いておられるが、そこにのせられた例は子どもの教育に非常に熱心すぎるほど熱心な母

親にしばしば見られるタイプであるだけに、大いに共感があった。つぎに簡単にその内容にふれてみよう。

◎しつけは行為であるということ

H夫人は児童心理学書や実践記録を熱心に読み、研究会や講演会にもよく出席して、しつけに関して學術論文が書けると思われるほどくわしい。しかしいざ実践しようとする、子どもは実際にはもっと突飛な行為をしがちであるし、自分もまた頭の中で考えていることと実際の行為は違ってしまう。こういうときのH夫人と子どもとの関係を診断してみると、理屈の上でいろいろとつばなことを知っているだけに、かえってその通りいかないためにいらいらしたりする場面がみられる。いくら書物で知識をたくさんえていても、実際には子どもの遊びに母親が介入しすぎたり、気持ちにゆとりがもてなかつたりするのではだめで、しつけとは母親のもっている知識できめるのではなくて、実際場面に測しての行

為であるということに注意してほしいということがある。

◎母もまた社会人であるということ

これもまた子どものことに関して熱中せる母親の例。

N夫人は子をもつ母として子のためにつくす楽しみにまざる楽しみはないとして、慰勞、趣味、教養に関する生活はいっさい子どもを中心として考えているということである。だが、一人の女性の役割は母であるということの他に、なお二つの重要な面がある。妻であること、そしてさらに社会人であるということである。子どもにつくすことだけでは、これらの役割は果されるはずもない。社会生活を営む人として、社会的に教養ある人間となるように日々務めることもまた重要である。

これからの母親は、自分の子を育てることだけに夢中になりすぎないように、よい子が育つようなよい社会をつくるということとを念頭において、よい社会構成の一員と

なる努力をしてほしいということが注文として出されている。

『おかあさんのページ』として、よい内容がもられていると思われた。

幼児の指導

上沢謙二氏の新保育読本の「活読と探読」は、私たちが読書する上に参考になり啓発されると思うので、要約してみる。

保育者は勉強が足りないということを感じている。勉強にとって、便利で有効なことは読書である。その読書の仕方にもさまざまな方法がある。通読、熟読、味読、心読などあるが、保育者へすすめる方法の一つに、活読ともいわれるものがある。それは、自分の実際の立場、生活にひきくらべて読むことで、今読んでいることが、どうすれば、自分の実際の生活に活かされるかと考えて、読むことである。たとえば一冊の幼児心理学を読んでその見聞、知識、

自覚が毎日の保育にどう応用されるか、どう利用しようかという立場で読む。この立場で読んで、読書が現実の場に活かされる。

その二は、探読ともいわれるべきもので、一定の問題をもって、本に向うことである。毎日の保育において、始終疑問にぶつかると、真剣になればなるほど、追究すればするほど、問題はそれからそれへと出てくる。この本にその解決の道は発見できないか、と一種の予想や期待をもって探すことである。熱意と執着があれば、必ず栄養が得られる。私たちは読書に、この二つの態度を加え、時間を有意義に使って勉強したいと感じた。

なお、園の保育設計、大阪常盤幼稚園の保育室の工夫、園庭の計画の実際や、宮内孝氏の保育内容、社会についての具体的な解説などすぐに役立つと思う。

幼児と保育

一月号は特集として「実践を深めるには」というテーマをとりあげている。忙しい仕事に追われつづけている現場では、毎日毎日の保育がただ無事に過ぎていくというだけでも、そのために払われる教師の努力はなかなかたいへんなものがある。しかしそれだけで、それらの経験の断片が明日の保育に役立つ貴重な経験として、積みかさなっていくものであろうか。

忙しい毎日の中でも、ときには立ちどまって「実践を深めるには……」と考えなおすことは、効果ある保育を望む熱心な教師たちにぜひとも必要なゆとりであろう。しつけの面についても、一貫性のないその場しのぎでは、昨日の経験が今日のしつけの役に立たない。教師や母親がいくら躍起になっても効果のあがらず徒勞である。第一しつけられる子どもにとっても迷惑なこ

とである。

本号の「間にあわせのしつけ」は、しつけについてたいへんわかりやすく説明している。しつけということがよいことと悪いことの区別を教えるものであること、そしてその区別を教えるためには、ほめることと叱ることが必要なこと、正しい叱り方とほめ方、そしてこれらがその場限りでなく子どもの将来を考えてなされなければならないことなど、教師も母親も一読の要がある。実践をつみかさねるには」という、座談会の記録は自分の保育を反省するきっかけともなるであろうし、何でも話しあえる園長と職員」は組織の面から、城郷地区幼少研究会の歩み」は地区の幼稚園間の、または教師と父兄との関係の面からそれぞれ教育効果をたかめるために掘り下げて考えなければならない問題を提示している。

保育ノート

日本人のよい面というか、悪い面というか、ジャズソングがはやればだれでもが口ずさみ、「こういう方法が最新式である」となればみんながそのやり方をまねする。こういうことが教育の面にあつて、戦後受け入れ態勢がとれないままにいろいろな方法が試みられ、また教材が取り入れられてきた。

その一つが視聴覚教育である。こういうわけてからあらためてみなおしたようなものこうとりたてていわないまでも、昔から幼稚園教育の中には、ある程度のものはやんと考えられていた。(絵本、紙芝居、模型、標本、写真、絵画、はり紙など)けれども、最近のように器械文明が発達するにつれて、外国語のまま呼ばれる、ラジオ、テレビ、スライド、テープレコーダーなどが影絵、人形劇、絵ばなしなどに加わつて教材として用いられるようになった。

幼児に、そういう経験をもたせるための必要、方法、効果、注意などが、最初の

「視聴覚保育と幼児の心理」を読むとよく分る。

また、一番必要と考えられ、どこでもそなえられているが、一番何ということなく取り扱われている絵本について書かれた、竹田氏の文は心してよみたいものの一つである。

全体を通読して感ずることは、保育に当る者として、日常子どもにも好まれ、先生もまた手なれて安易に扱っている聴視覚の教材が、とかくただ材料として割に深い思慮を払われずに用いられているのではないか、ということについて反省のよい機会を与えてくれる。

保 育

一月号読後感二つをご紹介します。

『就学の準備にまつわる二つの問題』山下俊郎氏。『子どもの生活と遊び』松村康平氏。

以上は現在母親も幼稚園の先生も直面している問題で、その点だけでも声を大きくして読みたいものです。

前者の二つの問題とは結局、幼稚園教育を小学校の準備教育とする考えの誤差で、文字や数に関することで、特殊学校への入学のためのテスト練習の二つの問題で、もちろん筆者は幼児期は生活全体と偏りなく育て、調和的に育てて、つぎの児童期や、のちの青年期になって十分にのびていくことのできるような土台を築くべき時期である(本文引用)と述べ、文字や数を特別に指導すること、テスト練習のいかに無意味で幼児教育の主旨に反するかと、いましめである。時期も時期、幼児数の減少などからみ、父兄からの要求も強いので、とくに世の父兄方に読んでいただきたく、また先生も自信をもって主張する力を与えられることと思う。

つぎに後者は幼児の生活全体である遊びを取り上げ、その準備、内容、誘導のしか

た、工夫などにわたって書かれた『遊び十
二ヵ月』という最新出版の書物の紹介でも
あるが、遊びの大切なこと、遊びこそ指導
すべきということが述べられ、参考にな
る。とかく幼稚園へいくと何か教育される
ことを要求され、また実行しているこの頃
に、遊びの大切なことが取り上げられたこ
とは保育を反省するよい機会を与えてもら
ったようである。この文面だけでは遊びの
考え方に、やや疑問を持つ点もあるが、そ
の点内容をみなくてはという筆者の書物紹
介の観点かもしれない。

月刊保育カリキュラム

この本の一月のカリキュラムの単元は
「冬をたのしく」となっており、ねらいは、
(一)寒さにうちかつ戸外あそびのいろ
を工夫させる。
(二)経験したことをすすんで発表させる。
となっている。

形式は月案としてあげられていて、その
ために月案にあげられた各保育内容の具体
的な説明となっている。

そこで今月は寒いときでもあり、健康の
ところであげられている「戸外あそび」の
項を紹介することにする。

戸外あそびといっても、いわゆるぶらん
こなどの遊具を使っての自由あそびではな
く、ある程度のルールのある団体あそびで
ある。とくに入学前の年齢の幼児などは、
こういう遊びを喜び、また先生の指導のは
いった遊びにみんなが参加する、参加でき
るといいうことも、ある程度大切なのはな
からうか。

ここでは十一にわたる鬼ごっこがあげら
れていて、中には「そうそう、こんなのも
あった」といままさら、思い出すものもあ
り、手つなぎ鬼、からかい鬼、けん鬼、場
所とり鬼、ひょうたん鬼などもおもしろ
い。

幼児の教育 第五十六巻 第四号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年三月二十五日印刷

昭和三十二年四月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願い致します。